

九州大学

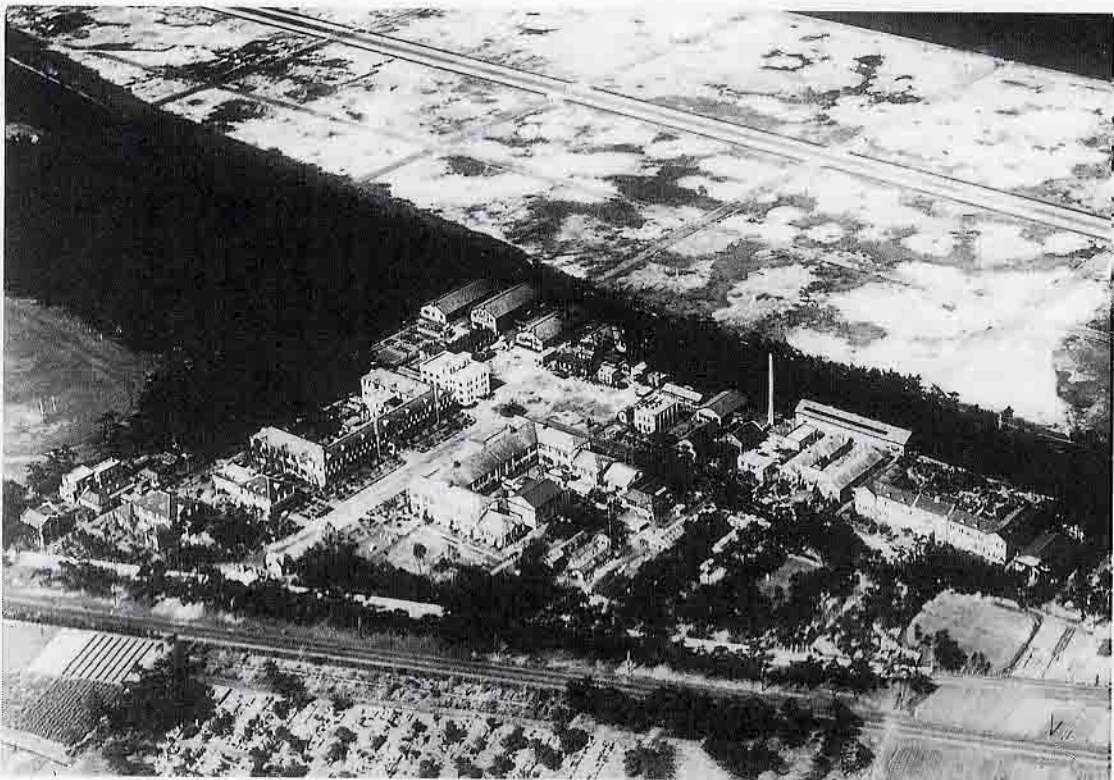
大学史料室ニュース

第17号

2001. 3. 31.

目 次

独立行政法人下の大学公文書館……………	2
史料紹介「張兆豊『留学生後日物語』」……………	4
受贈図書一覧……………	7
大学史料室日誌抄録……………	8



九州帝国大学農学部全景（1936年）

1911年（明治44）1月、従来の京都帝国大学福岡医科大学（1903年創設）と新設の工科大学とで始まった九州帝国大学は、1936年（昭和11）11月に創立25周年の記念行事を挙行了。写真はこの時に作成された「創立二十五周年記念絵はがき」のなかの1枚（原版）である。写真左側に工学部グラウンドと松林、上方に埋立地とその中を走る国道3号線、下方には鹿児島本線が見える。農学部を代表する建物であった農芸化学本館は1931年（昭和6）2月に全焼し、その再建は同38年（昭和13）9月のことなので、まだ空き地のままとなっている（現農学部6号館の場所）。

# 独立行政法人下の大学公文書館

小池 聖 一

独立行政法人化を目前にひかえ、各国立大学では、情報公開法の公布と国立大学設置法の改正をうけて、IT化にともなう情報媒体の多様化と個人情報に対する公開請求の増大化をにらんだ情報公開を競って行おうとしている。これは、各国立大学が生き残りをかけて他大学との差別化を果たし、独自性を出そうとする動きの一つであるといえる。そして、少子化のなか大学は、密度の濃い教育と研究、これをささえる柔軟で小回りの利く組織が求められている。

しかし、「駅弁大学」とも称される地方の国立大学は、これまで総合大学としての体裁を整えることを第一に考えて組織を肥大化させてきた。このため、組織面で大学間の差別化、独自化が困難となっている。さらに、大学自治にあぐらをかいた大衆化が意思決定システムの根幹にまで浸透しているため、社会環境の変化に対応できなくなっている。その意味で、地方国立大学の多くは、「恐竜の滅亡」に似た状況下にあるといっても過言ではない。故に、バブル崩壊後の企業同様、独立行政法人化にともなう競争原理が導入されることを多くの大学人は「危機」と認識するのである。だが、発想を変えれば独立行政法人化は、地方国立大学にとって地方分権化の流れにあって地域特性を大学自体の歴史と伝統をもって強調し、組織を柔軟で合理的なものとするれば、確固たる地位を獲得する千載一遇のチャンスでもある。今こそ、地方の国立大学は、「知の護送船団」的発想からいち早く脱却して独自の航海に乗り出し、チャンスを活かさなければならない。そのためには、迅速で英知ある政策的意思決定と、これを支える効率的なシステム、そして、豊富に揃えられた海図が必要である。

このようなシステムと豊富な海図をどのように整えるのが、まず、地方の国立大学にとって重要な戦略的要件である。その解決策として、また、大学にふさわしい、それ自体が学問の対象である大学公文書館の設置を提言することとしたい。

## 行政の効率化と大学公文書館

各国立大学の管理・運営における政策決定は、学長等の諮問をうけて企画関係の委員会が立案し、

それを事務局で調製、執行部の意思決定をへて評議会等に提出、その決定（実質的には承認）をうけて執行される。この政策過程で、多くの教官が本務（研究・教育）を離れて参画し、貴重な時間を消費している。そして、この動きは、文書として記述され、記録（ファイル）となって蓄積される。しかし、往々にして、蓄積された記録・文書は、再度、利用されること無く退蔵されている。このため大学は、常に新しい政策を立案しなければならず、調査や合意形成にかかるコストを増大させつつけている。だが、実態は、既に議論され、基礎となる案が過去にあることも珍しくない。もし、そのような前例があれば、立案過程での時間は短縮でき、また、大学内での合意形成も容易であろう。

このような、大学における政策立案のための文書整備機関として公文書館が情報公開法の公布を利用して、大学に導入される必要がある。この大学公文書館は、情報公開が教官文書も対象とするため、学長直轄部局として設定され、保存期間を過ぎた非現用記録（非現用記録とは、実際の執務に使用されなくなった記録・文書）の一元的管理と歴史文書化（大学の歴史および学術的な意味を有する文書）に伴う文書整理を通じて、また、自大学の刊行物および他大学の資料をも一元的に管理することによって、大学のシンクタンクとしての意味を持つこととなる。さらに、公文書館には、閲覧・照会業務があり、外に開く組織であるため、情報公開機関としての意義ももつ組織なのである。

## 歴史文書化に伴う研究機能

また、大学は、それ自体が学問の対象であり、歴史的存在でもある。現在、執務に使用されている記録・文書（現用記録）も、保存期間が超過すれば非現用記録となり、大学史研究上の重要な資料となる。その際、できうる限りのスペースを確保するにしても、狭い日本のこと、全ての文書を歴史文書として保管することはできない。このため、どの記録・文書を残し、何を廃棄するのが問題となる（この取捨選択も記録史料学や、記録管理学という学問の対象となっている）。残すべき文書として大学の管理・運営に関するものでい

えば、評議会等の議事録とともに、決裁書式を有する原議と、その代替案を中心とする行政文書があげられる。この行政文書を調査・報告書を含めて成立した政策の過程が理解できるように残す必要がある。また、学籍簿や人事記録等についてはそのまま永久保存文書として、会計文書等については基本的に決裁文書を保存すべきである。学生関係文書についても、政策文書は当然として、成績簿や、社会学的分析の対象ともなる諸調査や報告書等が保存の対象となる。また、講義ノートや著名な研究成果等による教官資料も収集の対象ともなるだろう。これらの記録・文書は、大学公文書館で事務局にあった際の局課ごとの分類でなく、内容別に再分類し、目録を整備することができれば、より大学の研究、政策立案に寄与することとなるだろう。

また、大学公文書館では、上記の残される記録・文書（歴史文書）を分析して研究の対象とする。研究は、大学史、高等教育政策を含む文教政策が中心となり、大学と学生との関係から社会学的分析も行うこととなる。これら大学史研究は、大学の沿革を通じて歴史を明らかにして大学の独自性や個性を明確にし、現在、そして未来へとつながる基本の海図を提供する。文教政策研究は、大学をとりまく全体状況を理解し、未来を予測する一助ともなる。また、社会学的分析は、地域特性や学生の志向等、大学の特徴を明らかにするだろう。教官文書の存在は、大学が知の集積体であることの証明でもある。つまり、収集・整理された記録・文書を使用した研究からは、大学が歴史的存在であり、時代とともにあったことが理解できよう。

公文書館は、閲覧業務を通じて大学の情報公開の窓口であり、照会業務を通じて情報公開サービスを行う機関でもある。広く一般に公開することで、大学が地域とともにあり、地域に貢献することを明らかにしよう。また、収蔵された資料を用いて常設展示および企画展示等が行なわれるならば、卒業生や校友が集える場所ともなり、独立行政法人化にあたって必要となる後援組織の核ともなる。そして、上記のような研究センター機能は、大学の歴史を講義として学生に供給するならば、学生のアイデンティティーを高めることにもなる。

### 公文書館設立にあたっての施策

上記のような大学公文書館を設置するためには、大学事務局の現用文書管理を充分に行うための文書管理規程と、保存期限が超過した文書をそのま



大学文書館を発足させた京都大学

ま大学公文書館に移管するための文書移管規程、そして機関化のための公文書館規程が必要である（既に京都大学では実現している）。

また、その組織は、中心となる文書整理・収集機能とともに、政策立案のための調査機能、情報公開機能（閲覧・照会業務）および研究センター機能（大学史・学術部門）の四点が必要である。そして、その構成員は、文書整理・収集と研究センター機能を担う教授以下の研究教官（アーキビスト・資料研究担当教官）と調査員、政策立案担当のマネージング・プロフェッサー（行政担当教官）および情報公開担当の事務官等からなり、教官組織と事務組織とが一体化した組織となる。また、その運用にあたっては、全学委員会として運営協議会をおくことも必要となるだろう。

このような公文書館の設立は、大学内に散在する調査・立案、研究、保存機関を統合し、学長のもとで一元的な体制を組むこととなる。その意味で行政効率化を促し、そのスケール・メリットを利用した新たな政策展開が可能である。さらに、研究センター機能面では、大学の独自性を明らかにし、全体のなかでの位置付けと研究を通じて大学間の交流も促進されるのである。

国立大学が事務組織面で、私立大学に劣る理由は、組織が職掌ごとに細分化され、事務官定数削減により中間管理職の比重が大きくなっていることがあげられる。国の行政改革のみならず、地方公共団体でも職階制の見直しが始まっている。公的機関としての大学も、今後、より組織のスリム化が迫られることとなるだろう。この点、本提言の公文書館は、現行学内の類似機関の整理にも寄与し、政策立案と情報公開に役立つ研究組織であることに意義を見出している。

なお、公文書館を設置する際、注意しなければならないことの一つに公文書館を単なる歴史資料館としてはならないことがあげられる。現在、国立公文書館が有効に機能しない最大の理由は、江戸幕府の文書である内閣文庫を有するため、館としての性格が二つに分裂させられているためである。結果的に国立公文書館は、「公文書館」としての性格設定が曖昧となり、文書の整理・公開が進ん

でいない。この点に留意し、あくまでも大学の「公文書館」としななければならないと考えている。

最後になるが、私自身は、歴史学を専攻している。しかし、歴史学が今後も継続するため、今ある文書の整理・保存を行うことは、未来の歴史学研究に寄与することでもあると考えている。

(広島大学総合科学部助教授。元外務省外交史料館外交文書編集担当)

## 史料紹介

### 張兆豊「留学生後日物語」

#### 解説

現在九州大学は、アジアへの玄関口に位置する大学として、多くの留学生を受け入れている。そしてそれは、昭和戦前期においても例外ではなかった。今回、以下に復刻という形で紹介する史料は、今から65年前の1936年（昭和11）11月6日付九州帝国大学新聞に掲載された「留学生後日物語」という記事である。表紙写真の説明でも記したように、当時九州帝国大学は創立25周年を迎えており、九州帝国大学新聞もその記念特集号を編んだ。因みに1936年という年は、九大の戦前期における留学生数（現員数）が、154名と最多数に達した年でもあった。

同記事の筆者張兆豊氏（福岡県久留米市在住。1909年～）は、中国福建省福清縣高山市原籍の長崎第3代華僑。長崎高等商業学校（現長崎大学経済学部）を卒業後、1933年（昭和8）4月に九州帝国大学法文学部（法科）に入学（1936年3月卒業）、執筆当時は法文学部副手であった。以後、南京汪兆銘公館侍従を経て、戦後、台湾台北市辛克力潤滑油会社に1972年（昭和47）まで在職。同会社退社後は翻訳業に従事されている。本史料は九大中国人留学生の帰国後の活躍を紹介するという構成になっている。外国人学生自身の手になる記事（史料）として、極めて貴重なものである。なお、今回の紹介にあたっては、史料復刻という性格上、国名等については原文のままとし、また記事の不明な部分については、筆者張氏の御教示を得た。記して謝意を表したい。

(折田悦郎：大学史料室専任講師)

#### 一 はしがき

負笈東瀛、青松白砂の博多湾に聳え立つ九州帝国大学に、我が中華民國留學生が学びの道にいそしみ、三星霜或ひは四歳月の間言語風俗習慣食物の不便を忍び異地異郷の日本に在りて艱難險阻變幻多端な大学生生活を卒へ、或ひは卒業後も専門學術に切磋琢磨する事数年蜚雪の功空しからず、錦を着て故国に帰り、其の後の消息に至つては、全く不明で殆んど未知數XYZの儘、徒らに一般人士に『知り得ざるものとして』有耶無耶にする事は実に惜い事で、茲に開學二十五周年記念を機会に集められた消息で其の一端を述べ得る事は蓋し興味津々意味長々、当時のクラスメート及び其他の関係者をして思ひ出又は友誼のつらなりと成り得ば筆者望外な喜びである。

一概に留學生と称しても九大開學以來卒業生として本国に活躍する者既に百二十三名の多きに達し最近二、三年の事ではあるが専攻生として所定

の一部門を特に研究し其の蘊奥を極め得て帰國して勇往邁進する者既に十指に余る。

物語の内容も粗漏簡略、正確を期し得ないものであるから或は讀者をして満足せしめ得ないかも知れないが、努めて『依樣画葫蘆』の実を挙げたいと思つて居る。

惟ふに九州帝国大学は中華民國とは地理的に一帯帶水の近きにあるのみならず、留學生を遇する事殊に親切、學術を指導する事特に周到、和氣藹々の氣、学園に充ち充ち他の帝国大学の敢て真似し得べからざる氣風あり、誠に宜なる哉、九州帝国大学の留學生中より黎明中華民國を牛耳る偉材傑人の輩出するを見よ！

借問す！日本の識者にしてかゝるより好き半面に注目する者果して幾何ぞ！

#### 二 医学部

日本は明治維新後、国運隆昌科学急進、就中医

学は其の最たる者とか、蓋し欧米先進国の医学の精華を採り、衷心研究、遂に今日の大成をもたらしたのであらう。我が九州帝大に於ても之を裏書するが如く、医学部の歴史最も古く万般の設備も理想に近く、其の内容も充実し、遂に大正二年当時中国の医学尚ほ萌芽時代にあり、瞠若漠然として人後に落ちるを潔しとせず敢然「失之東隅収之桑榆」の境地に入りこの福博の天地に第一歩を印したのは呉萃蘭及び戒肇敏の両氏にして、実に九大に於ける留学生の先達である。其後毎年少き年は二名、多き年は七名の留学生来り、多士濟々、健将雲集、既に医学博士の学位を能く獲ち得た者大正六年よりこの方卒業生三十四名中十名の多きに達し、一意専心学位を得んとする碩学篤学之士尚幾何ぞ！好漢応に自重すべき哉！

医学部に於ては其他専攻生として籍を置き所定の研究を終へた者既に四名あり(昭和十一年三月現在)前者の本科卒業生と合する時は三十八名の多きに達して居る。

医学博士、医学士達の其の後の發展家、活動家として先づ第一に挙ぐ可きは医学部卒業生中既に北平大学総長の地位におさまつてゐる傑物が居る。誰あらう大正七年卒業の徐誦明(字軾遊)先生である。聊か九大の譽としても敢て恥しくはあるまい。のみならず其の御息女徐幼慧女士も父に劣らず目下我が医学部に研究して居る事である。或ひは御孫さんも来るかも知れないとは専ら噂雀の話である。其他医学部長級が一名、国立大学の教授が六名、公共機関の衛生技師長、軍医、或ひは熱帯病研究所副所長が各一名、余の者は大都市、例之南京、北平、上海、広州等の一流の開業医で治療の設備は言ふ迄もなく、のみならず殆んど全部が自家用の自動車を持ちそれが申し合せた様にリンコンキヤデラック等の高級車で毎日多数の患者の求めに応じて街道狭しと馳駆する有様は九大の為万丈の気焰を吐き実に当る可かざる者がある。仄聞する所に依れば一ヶ月の実収入が何んと五千円以上の者が数名あるとか！民国の社会に於て最上流の生活豪華版を繰ひろげてゐるのが又医学部出身の者である。聞き捨てならぬは北平に居を構へて開業して居る某大先輩の自動車の番号は忘れたが、電話番号が有名な六〇六号とかで、その為かあらぬか非常に名望の高い医者として毎日忙しくてやりきれぬといふ事である。

次に、医学部卒業生の変種として雄たる者は、大正十二年卒業の郭開貞(字沫若)氏であらう。即ち寧ろ郭沫若としてが通りがよく、卒業後は全然

毛色の変つた政治畑又は文学畑に於て名を成し其の著『中国古代社会研究』をはじめ『甲骨文字研究』及び『殷周青銅器銘文研究』は洛陽の紙価を高めた事は言ふ迄もない。

### 三 工学部

遠く俗塵を避け、箱崎の一端幽静渺然たる松林の中に聳え立つ工学部の象牙の塔に終日閉ぢ込もつて勉強した幾多の留学生は今何処！物質文明の為建設に、土木に、機械に、鉱山に、綺羅星の如き人材が送り出された事は工業の未だ充分發達し得ざる中華民國に取つては誠に縦横無尽に其の快腕を振ふに好都合な状態である。

工学部の最初の入学者は大正五年の何肇中氏である。其後昭和十一年三月現在迄我等の工学士様は三十七名で其の科が多種多様なので其の活動範囲も亦多岐多端に分れて居る。即ち大学、会社、官衙に奉職し或は省政府の建設事業にたづさはり渾身の努力を払ひ国家施設の為四面八臂の活動を続けてゐるが前途尚々遼遠の感なきにしもあらず。

先づピカーとして挙ぐべき好運児は見当らないが全部粒がそろつて居る故か、又は地味なエンジニアといふ社会的地位の為かその取捨選択に迷つて居る。尤も土木局長、兵工廠の課長級、技師長級が五名、大学教授が五名、聽て外国人技師の代りとして今後の中興工業界の第一線に立つ中堅技師が殆んど全部で工学士の初任給は百八十円が最低と聞く、最近の話であるが大学出の工学士が三百円近くの高給で招聘された者も居るから自分の腕次第、勉強次第では出世が約束されてゐる。尤も仕事が地味だから世間的に知られないが油にまみれて工業報国を目指して一生懸命働いて居る事實は誰しも認めて居る所である。古い先輩の事は扱て措いて昭和九年卒業の李徳銓君、昭和十年卒業の葛翔君共に某省の鉱業開發の重責を負ひ非常に奮闘して居る事は九大の為誠に慶賀に堪へぬ。

### 四 農学部

農学部は大正十年に創立され九大各学部中法文学部を除けば歴史の最も浅い学部である。この農学部の留学生の最初の入学生は大正十五年卒業の陳世璣氏外三名で陳氏は目下山東建設庁内に於て枢要な地位を占め其他の三名は農科大学或ひは専門学校の教授として後進の指導に、又農村更生に賢策を献じてゐる。

この学部の留学生は昭和十一年三月現在迄卒業

生は十七名で其内の半数は大学教授として日本で習った各専門学科を続けて研究し、各々学界に於ても羽振りを利かせて居る。

殊に昭和十年卒業の沈学源君は今般南京国立中央大学の教授として招聘され最新日本の農芸化学の紹介に必ずや貢献する所あらん。

其他の半数は各省政府の重要農業の発展、進歩、増産、改良の劃策の為益々前途洋々として活動して居る事は諸氏と共に喜びたい。

最近頃に殖えた農学部の特攻生中にも去る七月北平の国立高等農林の教授として赴任した何国模氏あり。氏は白皙瘦身風采至つて上がらぬ者であつたが日夜昆虫の研究に没頭した為遂に学者に認められ今日の地位を能く得たと聞く。須らく好漢自重せよ！

## 五 法文学部

九州帝国大学本部の右側の法文学部は前は山に面し、後は海に臨み、外観は白亜の殿堂頗る大理石の美術建築物に似、内容は社会科学の一切を網羅し、その研究室の完備、参考書の豊富は西日本に冠たり。大正十二年創立以来留学生の此処に來りて学ぶ者陸續として絶へず既に昭和三年に三名の第一回卒業生を送り昭和十一年三月迄十星霜に充たざるも卒業生の数に於いても、その質に於ても他の学部の特先輩に優るとも劣らざる頭腦明晰の学徒雲集し卒業後の活動たるや弱冠と笑ふ勿れ、外交に行政に実業界に銀行界に又ジャーナリストとして、行くところ可ならざるはなく卒業生にして齡三十五歳を越ゆる者なく其の前途は盛んなりと言はん。

卒業生三十九名の中教育界に走る者最も多く、其数十五名でその内十三名迄が国立大学の教授連で中には陸軍大学の教授として活躍する者もあり殆ど三十代の若手だから今後その教育界に於ける活動たるや推して量るべし。教授として待遇は初任給は日本の高等官三等の俸給と大差なく、唯憾むらくは未だ法文学部留学生中より総長学長の出でざるは蓋し年功のせいでもあらう。

其の教授連の名講義名著述は中国に於ても実効甚大、出版業者争つて出版の便宜を与ふるとか、本学部卒業生の著書は中国最大の書店商務印書館の出版にかゝる者既に汗牛充棟、又その理論の透徹内容の充実、学究態度の真剣、茲に紹介するも敢て無意義な事ではなからう。

次に位する者は政界に俺が天下を唱ふ者十名、実業界四名及其他となつて居る。

茲に政界に於て覇を称へ得たる者あるを聞くに於ては誠に法文学部の法文学部たる所以なり、誰あらう、昭和七年度法科卒業現南京政府外交部亜細亞司長高宗武氏なり。氏は南京にありてスチユドベーカーの自家用を乗り廻して活動し或ひはダグラス機に便乗しては所用を達し上海に成都に広州に廬山に終日終夜、その政務忙殺を極め殊に現在中日国交の立役者として第一線に大活動大活躍、其の責且重大、南京政府の御大將總司令の股肱の臣として唯一無二の日本通である。目下老巧川越大使須磨總領事を相手に平和的折衝に虚々実々の外交戦の檜舞台を一手に引き受け民国四億の民の与論の代弁者として其の苦心苦衷察するに余るものあり。

其他法文学部の出身者にして外交部の課長の地位につくもの既に三名、成都事件中国調査委員邵毓麟氏は日本科長の地位にあり昭和八年本学出身の経済学士である。其他新進の外交官周隆庠氏は日本語に於ては日本人以上学校成績は殆んど優を以て埋めその頭腦明晰教授をして瞠若感嘆せしめた事は今尚語り草として伝へられて居る。

あの有名な中華民国の女法学士朱毅如女士(昭和十年卒業)は一時江西省立大学教授に赴任せしも健康の為暫らく辞任、目下快癒南京政府立法院編輯処に於て女子立法を専ら編纂中、其他の優秀分子を紹介すべきも紙数に限りあり又物語りとして長きに失する恐れありこの位にしたい。

## 六 むすび

上述の如く国家有為の志士仁人を順調に育て呉れたのは九州帝国大学教授等の指導宜敷きを得又その学識非凡の致す所なれば誠に中華民国の為感謝に堪へぬ。

尚上述の如く九大卒業留学生は全部三十代四十代の青年で医、工、農、法、経、文を問はず帰国後は切実国を思ひ平和を願ひ、各自の職務に勉励し、為に席の暖まる暇なく、東奔西走寧日なく、或ひは表に立ちて国務に奮闘して国民政府を泰山の安きに置く者、或ひは国民の福利衛生の為努力する者、或ひは農村更生計画の第一線に活動する者、或ひは富国強兵の策に直接たづさわる者、或ひは教育文化の最高学府たる大学の教授たる者全て一丸となつて黎明民国の為、新興民国の為、血みどろになつて働き続けて居る真の姿を見る時又それが報ひられて非常な効果を収めつゝある時、広く九大卒業生諸氏及在学生諸君に訴へ何卒長い目を以て現在中華民国の姿を見、何とかして起き

上らうとする中華民国の努力に対してもう少し同情と助力を送つて貰ひたい。諸氏諸君の同情と助力に依り中華民国が立派な強大国となつた時には其処には数多の九大留学生が第一線に立つて居る

事実と照らし合せてひいて嘗つて同じ学園に学びし者の為努力を払つた事は起き上らうとする者と助けた者との間には一層融然混和する誼がきつと生じて来るに異ひないと確信する。

### 受贈図書一覧 (2000年7月～2000年12月)

- |  |   |
|--|---|
| 藤島正敏教授退官記念 九州大学大学院 病態機能内科学 (第二内科) 業績集<br>藤島正敏教授退官記念九州大学大学院病態機能内科学業績集編集委員会編 2000. 7 | 下関市立大学 1999年度実施 外部評価報告書 現代日本の大学教育を考える 一下関市大における教育の現状・課題を素材として一<br>下関市立大学 大学点検評価委員会編 2000. 6 |
| 木登り人生一人生の卒業論文一<br>井上由扶 1996. 3   | 獨協学園史 一八八一—二〇〇〇<br>獨協学園百年史編纂委員会編 2000. 5  |
| 草ヶ江 遠城寺宗徳生誕百年記念文集<br>遠城寺宗知 2000. 6   | 獨協学園史 資料集成<br>獨協学園百年史編纂委員会編 2000. 5   |
| 天児和暢教授 研究と業績<br>九州大学医学部細菌学教室同窓会 (青藍会) 1997. 3                                      | 校史 Vol.11<br>國學院大學校史資料課 2000. 8   |
| 写真で語る細菌学<br>天児和暢 1998. 2   | 清泉女子大学 創立50周年記念誌<br>創立50周年記念事業委員会記念刊行物委員会編 2000.11  |
| 40周年記念号 筍林 二〇〇〇<br>九大医学部三四会 2000. 4  | 拓殖大学百年史研究 五号<br>拓殖大学日本文化研究所附属近現代研究センター編 2000. 7   |
| 九州大学水泳部七十周年記念 千里蹴波行 特別号<br>九州大学水泳部後援会 2000. 9                                      | 東京経済大学創立100周年記念特別展示 大倉喜八郎と東経大百年 展示目録<br>東京経済大学創立100周年記念展示行事实行委員会編 2000.10                   |
| ヒポクラテスの歌 九大医学部愛唱歌集 1992.12   | サティア《あるがまま》 第39号～第40号<br>東洋大学井上円了記念学術センター編 2000. 7、2000.10                                  |
| 東北大学百年史編纂室ニュース 第6号<br>東北大学百年史編纂室編 2000. 8  | 法政大学1880—2000 そのあゆみと展望<br>法政大学大学史資料委員会 法政大学図書館 100周年記念事業委員会編 2000. 9                        |
| 東北大学史料館 Tohoku University Archives<br>東北大学史料館                                      | 早稲田大学史紀要 第三十二卷<br>早稲田大学大学史資料センター 2000. 7  |
| 東京大学史紀要 第一八号<br>東京大学史料の保存に関する委員会編 2000. 3  | 関西大学年史紀要 第十二号<br>関西大学年史編纂委員会編 2000. 3   |
| 名古屋大学史資料室ニュース 第9号<br>名古屋大学史資料室編 2000. 9  | 神戸国際大学史資料 第一集 新しい社会 新しい大学 学校と社会の基本的関係<br>神戸国際大学創立30周年記念史編纂委員会編 1997. 9                      |
| 名古屋大学史資料室保存資料目録 第1集 (名古屋大学関係分1) 2000年3月31日現在<br>名古屋大学史資料室編 2000.10                 | 神戸国際大学史資料 第2集 創立者八代斌助師父の思い出<br>神戸国際大学大学史資料編纂室編 2000. 9                                      |
| コリーグ No.30<br>広島大学高等教育研究開発センター編 2000. 9  | 神戸国際大学30周年記念史   |
| 教育の現状と課題 —1998 (平成10) 年度 自己点検・評価報告書一<br>下関市立大学自己点検・評価委員会編 1999. 3                  |   |

神戸国際大学創立30周年記念史編纂委員会編  
2000. 3  
同志社女子大学125年  
『同志社女子大学125年』編集委員会編  
2000. 11  
立命館百年史 資料一  
立命館百年史編纂委員会編 2000. 10  
龍谷大学三百五十年史 通史編 上巻  
龍谷大学三百五十年史編集委員会編 2000. 3  
旧制高等学校研究必携(第1版)-Handbook for  
Research of Higher Education-  
『旧制高等学校研究必携』編集委員会編  
2000. 8  
旧制高等学校の歩み 旧制高等学校記念館資料集

旧制高等学校記念館編 2000. 8  
大学アーカイブズ No.23  
全国大学史資料協議会東日本部会 2000. 11  
全国大学史資料協議会西日本部会会報 第9号  
全国大学史資料協議会 西日本部会 2000. 12  
野間研だより No. 3 ~No. 4  
池永陽一編 2000. 9、2000. 12  
県史だより 第106号~第112号  
福岡県地域史研究所編 1999. 11、2000. 1、  
2000. 3、2000. 5、2000. 7、2000. 9、2000. 11  
福岡 大島眼科病院八十年のあゆみ  
林道雄 1986. 8  
〔凡例〕  
掲載したのは受贈図書の一部である。

### 大学史料室日誌抄録(2000年7月~2000年12月)

7. 3 (月) 折田講師、情報公開ワーキンググループに列席。  
7. 4 (火) 各部局へ看板寄贈依頼文書発送(以後、石炭研究資料センター、比較社会文化研究科、言語文化部、応用力学研究所津屋崎海洋災害実験所、農学部附属早良演習林、文学部、教育学部・人間環境学研究科、大学院数理学研究科より看板受領)。  
7. 5 (水) 総務部総務課より所蔵文書移管(~6日)。  
7. 6 (木) NHKエンタープライズ21より、1927年農学部卒業生卒業論文の件につき照会。  
7. 7 (金) 総務部研究協力課より所蔵文書移管。  
8. 28 (月) 大学入試センター福岡進学情報サービス室より史料寄贈(~29日)。  
9. 6 (水) 小池聖一広島大学助教授、史料調査のため来室。  
9. 14 (木) 藤島正敏名誉教授より史料寄贈。  
9. 20 (水) 折田講師、全国大学史資料協議会  
2000年度総会・全国研究会に参加(~22日。於関西学院大学等)。  
9. 25 (月) 箱崎中学校生徒5名、大学史料室見学のため来室(新谷室長引率)。  
9. 26 (火) 伊藤昌司大学院法学研究院教授より史料寄贈。  
9. 28 (木) 学務部入試課より史料受領。  
10. 19 (木) 原暉之北海道大学教授、大学史料室視察のため来室。  
11. 9 (木) 京都大学百年史編集史料室、同総務課より視察のため来室。  
11. 24 (金) 折田講師、大学史研究会に参加、「地域と大学」発表(~27日。於志学館大学)。  
11. 28 (火) 遠城寺宗知名誉教授より史料寄贈。  
11. 30 (木) 天児和暢名誉教授より史料寄贈。  
12. 1 (金) 島田良一名誉教授より史料寄贈。  
12. 7 (木) 第26回大学史料室運営委員会開催。  
12. 21 (木) 今田盛生大学院農学研究院教授より史料寄贈。  
12. 27 (水) 企画広報室より史料受領。

九州大学大学史料室ニュース 第17号

発行日 2001年3月31日(年2回刊)

編集  
発行

九州大学大学史料室  
〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1  
電話・FAX (092) 642-2292

Archives of Kyushu University

印刷 (株)ミドリ印刷